

“湘南”論

衣を畳む（想／地層／記憶）：第4性_2

堀家 敬嗣*

What is SHONAN : 4.2

HORIKE Yoshitsugu*

(Received September 22, 2022)

4. 2 〈赤いスイートピー〉を揺らす“風”

4. 2. 1

大瀧詠一（1948-2013）が、大瀧詠一の名義のもと発表したアルバム盤《A LONG VACATION》（1981）には、「当時、気に入っていたJ・D・サウザーの「ユア・オンリー・ロンリー」をステレオで大瀧に聴かせ、「こういうAORっぽい、お洒落な音楽つくったら」と、プレゼン」¹するなど、その胎動期から松本隆（1949-）が全面的に協力している。

はっぴいえんどとともに日本の大衆音楽の歴史を変えたかつての盟友でありながら、すでに「職業作詞家としてヒット曲を連発する松本に向かって大瀧は、ストレートに「売りたい」というメッセージを松本の自宅に伝え」²たものの、「いざ『ロンバケ』の作詞に取りかかろうとするタイミングで、松本は最愛の妹を亡くし」³てしまう。このため「もう大瀧詠一とか、『ロンバケ』どころじゃなくて。すべての仕事を断」⁴らざるをえない心境となった松本を、「このプロジェクトは松本隆の詞ありきだから、書けるようになるまで、いつまでも延ばすから」⁵と大瀧は説得し、しばしの休止のちこの「「歌詞を待つ」という大瀧の強い言葉に押されて、松本はペンを走らせ」⁶、結果として大瀧による自作詞ひとつを除き《A LONG VACATION》の全篇の歌詞を仕上げている。

そのB面の冒頭に収録された〈雨のウェンズデイ〉には〔董色〕の〔雨〕が〔降る〕。この〔Wednesday〕に〔海が見たいわって言いだしたのは君の方〕なのに、いまや〔波より多〕くの〔傷つけあう言葉〕の応酬を恐れてか、〔ぼく〕が〔何か少し喋りなよ〕と促すほどに彼女は〔静かすぎる〕。〔壊れかけたワーゲンの／ボンネットに腰かけ〕た彼らのそうした光景は、松本によれ

ば「経験を描」⁷ている。ただし「現実はやや曖昧模範としているけれど、それを全部は書かないで、一部に凝縮させ」⁸たもののだといい、この楽曲の場合、浜辺に〔降る雨〕の〔董色〕にそれが結晶化していると語る。高校生だったころ、「当時の一色海岸は、砂浜まで車で降りられたから」⁹、友人のスバル360の助手席で海辺まで乗り込んだところタイヤが砂を喰んで立ち往生したことがあった。この歌詞の執筆にあたって、彼はその思い出に依拠したことを述懐している。つまりその「董色は葉山のイメージ」¹⁰なのである。

《A LONG VACATION》で多くの聴衆を獲得した大瀧詠一は、その余波をかって松田聖子（1962-）のシングル盤〈風立ちぬ〉（1981）の作曲者となる。この「大瀧さんの起用は松本さんからの提案」¹¹により実現した計らいであり、さらに彼は、ほどなくアルバム盤《風立ちぬ》（1981）のA面全篇の作曲と編曲も担当する。アルバム全篇の歌詞を担当した松本隆は、ここでシングル曲〈白いパラソル〉（1981）以外のB面全篇の編曲を担当した鈴木茂（1951-）ともども、ひと昔前のはっぴいえんどの試行を歌謡曲の中心に位置づけることに成功したのである。

〈風立ちぬ〉に先行したシングル盤〈白いパラソル〉の作曲者は、かつて職業作詞家となった最初期に松本が歌詞を提供した〈夏色のおもいで〉の作曲家であるチューリップの財津和夫（1948-）だった。そして〈風立ちぬ〉に後続する松田聖子のシングル盤として発表されたのが、呉田軽穂の筆名で松任谷由実（1954-）が作曲した〈赤いスイートピー〉（1982）である。

〈赤いスイートピー〉についてもまた、「青春時代の経験がいくつかごっちゃになって出来上がった虚構の世界。だけど、少しだけリアルが入ってる」¹²ことが、作

* 山口大学国際総合科学部 山口大学吉田キャンパス・horike@yamaguchi-u.ac.jp

詞家本人の口から吐露されている。〈雨のウェンズデイ〉の〔董色〕が葉山の一色海岸に〔降る雨〕のイメージだったように、歌詞の主人公が〔あなた〕と〔二人〕で〔春色の汽車に乗って〕やってきたここで、「〔春色の汽車〕はオレンジ色と緑色の湘南電車のイメージ」¹³だと告白する松本隆は、より詳細にこのイメージを解きほぐしてみせる。湘南電車から「江ノ電に乗り継いで鎌倉高校前あたりから商店街を通り抜けると、海が見えてくる場所があって、その景色が好き」¹⁴だという彼は、その「線路脇に赤いスイートピーが咲いていたら可愛いだろうな、とも想像して」¹⁵この歌詞を綴った。要するに、あの葉山がそうだったように、ここでは鎌倉もやはり色をもってイメージされているわけだ。

日本でもっとも古い鉄道路線である現JRの東海道線のうち、「戦前から東京－小田原・熱海・沼津間に運転されていた電気機関車けん引のローカル列車」¹⁶のことを、すでに「国鉄部内（当時の言葉では省といった方がよいかもしれない）では（…）「湘南列車」と呼んでいた。戦後にいよいよ電動列車という構想がまとまって（…）この呼称がそのまま「湘南電車」に変わっ」¹⁷ている。だから、まったく「正式のものでないのに、営業開始以前に相当この呼び名が使われていたおかげで、東京駅の発車ホーム案内にも最初から「湘南電車」と書かれ、語呂がいいせいもあって世間一般に広まるのも早かった」¹⁸とされる。このとき、その電化にあわせて「さまざまな画期的な技術を導入しデビューした80系電車は、「湘南電車」として親しまれ」¹⁹ようになる。1950年のことだ。

こうして「一般には好評を博した」²⁰湘南電車だったが、ただし松本隆が言及している塗色については必ずしもそうではなかったらしい。「世論をわかした一つにあの外部色がある。（…）ただそのオレンジ色に問題があった。つまりオレンジよりも赤が強く柿色に近かった」²¹のが当初の塗色だった。「小さな色見本板で決定された色は、大きな面積で現われるとかなり感じもちがう」²²ため、その仕上がりへの当惑から、以後は「少し黄色の方へ色相をずらして、いわゆるみかん色に変更され」²³ている。これらの塗色は、もともと電化による「高速運転のため遠くからよく見える色としてオレンジ色が選ばれ、これに調和する色でなるべくよごれの目立たぬ色ということであの濃いグリーンが決ま」²⁴ったのであり、しばしば言及される「沿線のみかんの実と葉の色にあわせて選んだ2色という解説は、実はあとで考え」²⁵られたものである。

湘南電車が廃止された昨今でも、その語感は、たとえば“湘南新宿ライン”といった系統路線名に残っているが、なるほどこのような経緯からすれば、ここでの松本の

〔汽車〕の語用は、どれほどか時代的な錯誤を覚えさせることは否定できない。狭義の汽車が、そうした電化以前の、蒸気機関が駆動させ、牽引する車両のことである以上、彼の脳裏に映える湘南電車の塗色は、その蒸気と煤煙とでただちにくすみかねないわけだ。それでもなお、とりわけ日本国有鉄道由来の長距離路線で運行される列車などについて、これを慣習的に汽車と総称することもある。そのうえ、彼の〔汽車〕には、この作詞家の世界観を支配する“風”の概念が孕まれている²⁶。したがって、ここには古めかしさよりはむしろ、彼の“風”の流れをこそ聴きとるべきだろう。

ところで、東京駅を発して大船駅で鎌倉方面に針路をとる横須賀線も、「開業以来、しばらく東海道線（湘南電車）を利用して東京駅まで乗り入れ」²⁷、この区間は線路を借りて共有していたために、「保線関係では、東海道線と横須賀線が分離した今日でも、東京－大船間は、東海道“客”、東海道“スカ”と呼んで、あくまでも東海道線を基本にしている」²⁸。現在では、車体に東海道線を示すオレンジ色と緑色の色帯を巻いた“湘南新宿ライン”の車両が横須賀線の軌道を走行する運行事例もけっして珍しくない。それゆえに、〔春色の汽車に乗って〕きた〔二人〕が江ノ島電鉄に乗り換えたターミナル駅をめぐる、これを横須賀線の鎌倉駅と考慮することも可能ではある。

しかしながら、結局のところそれは「湘南電車と並行して走る横須賀線」²⁹にすぎない。東京駅から大船駅を経由して鎌倉方面へと走行するその路線をとおして、すでに横須賀線は自前の線路を用意され、完全に東海道線からの分離を達成してから数年が経過し、しかも“湘南新宿ライン”の運行ははるか将来のこととなる〈赤いスイートピー〉の発表当時、オレンジ色と緑色に塗りわけられた湘南電車からは、江ノ電のもう片側の始発端に位置する藤沢駅で乗り継がれたものとみなすほうが自然なはずだ。

さらにこのことは、松本が回想する江ノ電の車窓からの風景が「商店街を貫く道路の真ん中を線路が通っている区間」³⁰についての描写からはじまっていることから推察できる。藤沢駅を発したのち江ノ島駅から腰越駅までの江ノ電は併用軌道であり、「鉄道でありながら、路面電車と同様に、一般の自動車と電車が並走している場所で、かつて路面電車だった時代の姿がそのまま見られる区間」³¹として保守されている。事実、江ノ島駅から道路に合流する際の「S字カーブ（…）は急で、鉄道としては日本で最もきつい曲線」³²となっているが、これも「かつて路面電車であった頃の名残」³³であって、そのような「鉄道としては本来、認可されないはずの急曲線もまた、特例として存在している」³⁴わけだ。

江ノ電のこうした側面は、《風街ろまん》(1971)に収録されたはっぴいえんどの〈風をあつめて〉の歌詞における〔起きぬけの路面電車が／海を渡るのが見えたんです〕の文字列をも想起させる。なぜなら、交通信号にしたがってこの併用軌道を進行したすえに、やがてその車両は次の「腰越駅を出発すると、立て込んだ住宅の軒先をかすめるように走る。住宅地からやっと抜け出し左に大きくカーブすると、右手車窓いっぱい海が広がる。江ノ電の車窓風景でもっともすばらしい場所」³⁵に、いまその短い電車はさしかろうとしているからである。

さらにはその行方で、「ゆっくり海を眺める間もなく、江ノ電は鎌倉高校前に到着する」³⁶だろう。要するに、腰越駅から「海に迫る崖に沿って大きく左にカーブして、海辺を走る線路に入」³⁷った江ノ電は、「ホームから海が眺められる、江ノ電でただ一つの駅である」³⁸鎌倉高校前駅に到着するまで、きわめて劇的な風景の転換を乗客に堪能させるわけである。この海浜が七里ヶ浜である。

この限りにおいて、ひとりの過客である松本隆は、車両の進行方向に応じた到着駅の順序に関して記憶をたがえているように思われる。藤沢駅から鎌倉方面へと出発し、ようやく江ノ島駅の先の急カーブからいったん商店街で自動車と併走する路面電車となった江ノ電が、その軌道をあとに腰越駅に入構したうえで、これを背にして民家の軒先をくぐるようにすり抜けた眼前に七里ヶ浜が広がる場所、彼が好きな景色とは、おそらくは鎌倉高校前駅を次の停車駅として準備するこのことである。かつて〔街のはずれの／背のびした路次を 散歩して〕いたとき、あの〔起きぬけの路面電車が／海を渡るのが見えた〕彼のいま搭乘しているこの車両が、〔緋色の帆〕のごとき〔赤いスイートピー〕に見送られ、まさに件の電車になろうとしている。

もはや湘南電車とも江ノ電ともつかない〔春色の汽車に乗って海に連れて行ってよ〕とねだる〈赤いスイートピー〉の主人公もまた、作詞家がそうであるようにひとりの過客である。ただしそこには、彼女を〔海〕まで〔連れて〕きて、不意に〔四月の雨に降られて駅のベンチで二人〕きり孤立させる〔あなた〕がいる。次の〔汽車〕が、すなわち次の季節がまだ到着する気配はない。それなのに〔あなた〕は幾度となく〔時計をチラッと見る〕のだから、その〔たび／泣きそうな気分にな〕って〔このまま帰れない〕との決意を反芻する彼女は、なにかしらの不穏にして不吉な胸騒ぎさえ抱えているのかもしれない。

4. 2. 2

横光利一(1898-1947)ならば、この車両を馬に牽引

させ、その動力としたはずである。『春は馬車に乗って』(1926)は、題材に横光の妻となる「小島キミの死(大正十五年六月二十四日、婚姻届出は死後の七月八日)が取りあげられ」³⁹た短編小説である。

結核を悪化させた君子の寒期を養生するために、前年の秋には葉山の森戸海岸に転居していた横光利一は、その病状のいっそうの進行に、「重症者はいれないと云ふ」⁴⁰ところを「頼んで貰って漸く」⁴¹、「肺病院」⁴²としてこの年に逗子の小坪に新設されたばかりの療養所に彼女を入院させている⁴³。それだから「此處の病室には愛と日光とが行き渡つてゐ」⁴⁴もするのだが、ここでの療養も虚しく、水無月のはじめの入院からその月末を待たず「妻君子儀廿四日死亡致し候」⁴⁵との葉書がしたためられることになる。

そこである雨の日をめぐって、横光利一は、ごく短い随筆の体裁で『寝たらぬ日記 湘南サナトリウムの病院にて』(1926)を著している。「食慾のない病人は、ひたすらに花にすがつて瘦せて行」⁴⁶くよりほかないためか、君子のもとには「花束が見知らぬ患者から贈られ」⁴⁷てくる。そうして「今日の花は薔薇と菊と雛罌粟と、名も知らぬか弱き花と」⁴⁸が病室を飾るなか、その「翌日である。雨はやん」⁴⁹で、彼は「バルコオン」⁵⁰のものと思しき「この高み」⁵¹から「病んだ妻の着物が竿に長くかかつてゐ」⁵²の様子を俯瞰している。この着物については、両袖を貫いて竿をとおされ、身丈の伸びて長く垂れたさまに言及したのか、それとも前日の雨のなか、取り込まれることもなく濡れたままこれが長らく放置されているさまに言及したのか、判然とさせない。しかしいずれにせよ、最新の清潔な医療施設をもってしてなお、この雨期のさなかの療養が病人の回復になんら功を奏していない虚しさは伝わる。

たとえば「昨夜はベランダで寝た。目を開く度に、月が鼻のさきにぶら下がつてゐて邪魔になつた」⁵³とする描写あたりに、新感覚派的というべきか、どれほどかの装飾性は認められるものの、「川端康成の葉書が舞ひ込んで来る」⁵⁴など、ここでの記述の根本は、なるほど日記的に事実を書き留めたものと理解してかまわないだろう。この随筆が君子の死からほとんどまもない文月の初日に公表され、『春は馬車に乗って』はさらにその翌月の初日に発表されていることを考慮するならば、仮にその短編小説が「亡妻への愛を込めた鎮魂と、利一の青春への挽歌」⁵⁵なり「自然に歌ひ出でられた青春の歌」⁵⁶なり、もしくは「〔妻〕の病と死とを取りあげながら、私小説の手法には寄らぬ」⁵⁷表現だったところで、随筆のかたちで記述されえた事実を下敷きに、作家の経験を相応に反映して執筆された作品としてこれを捕捉することに無理はない。

ただし、『春は馬車に乗って』において「妻の寝てゐる寢臺」⁵⁸が据えられた「妻の病室」⁵⁹は、あの湘南サナトリウムのものでなく、そこには「彼の空いた書齋」⁶⁰すなわち彼の「自分の部屋」⁶¹も設けられている。「彼の家」⁶²のものだ。それゆえ、ときに「彼は醫者の所へ妻の薬を貰ひに行」⁶³かなければならない。そうするまでは、「もう彼は家の前に、大きな海のひかへてゐるのを長い間忘れてゐ」⁶⁴て、他方で妻は、「絶えず、水平線を狙つて海面に突出してゐる遠くの光つた岬ばかりを眺めてゐ」⁶⁵る。加えて、その「庭の片隅で一叢の小さなダリヤが縮んでい」⁶⁶くなか、妻との会話に彼女が「胸の病氣で寝て了つた此の一年間の艱難を思ひ出」⁶⁷すうち、この「ダリヤの莖が干枯びた繩のやうに地の上でむすばれ出し」⁶⁸、ついに「潮風が水平線の上から終日吹きつけて来て冬になつ」⁶⁹てしまうのだから、横光が妻の寒期の養生のため転居し、葉山の森戸海岸に借りた家屋をこそ、この小篇の舞台とみなすべきだろう。

かつて横光と君子とが仮住まいしていた森戸の住所番地では、のちに20世紀と21世紀をまたぐ30年ほどの期間、いわゆるファミリーレストランのチェーン店舗のひとつに相当するその葉山森戸店が営業しており、この利用者なら誰もが、まさに「泉水の中の鈍い亀の姿を眺めて（…）亀が泳ぐと、水面から輝り返された明るい水影が、乾いた石の上で揺れてゐ」⁷⁰そうな池の設えられた庭を、確かに海浜に面したこの敷地で実際に視認することは容易だった。要するに、事実取材してこれを小説に変換し、病身の妻の最期を言語表現として描出するにあたって、横光は彼女の終焉の場所を逗子の小坪から葉山の森戸へと、その季節を夏から冬へと転移させたわけだ。彼の現実的な、したがって具体的な思い出の個別性は、いったん過去一般が回収してこれを非人称化し、経験上の因果の紐帯が解きほぐされたうえで、横光利一之感覚をもって検索され、その言語をとおして再構築され、その筆致によって書記されたのである。換言すれば、湘南サナトリウムへと転院しないまま、森戸海岸の借家での療養を継続した場合の、妻の今際のきわを彼は夢想したのである。

ところで、その庭のダリヤは、いわば映画におけるモンタージュの手法のもと、以降もシーケンスの転換するごとにその端緒に登場する。「花壇の石の傍で、ダリヤの球根が掘り出されたまま霜に腐つていつた」⁷¹、あるいは「彼と妻とは、もう萎れた一對の莖のやうに、日日黙つて竝んでゐた」⁷²など、この宿根草が寒気に晒されて次第にその活力を蕩尽させていくさまを提示しながら、横光は、単に時間の推移をたどるばかりか妻の死兆をもなぞってみせるのである。植物とりわけ花草が病室を彩るとともに、そこに臥した彼女の体調を、気分を、

心理を、将来を象る隠喩となることは、すでに湘南サナトリウムにあって誰とも知れぬ患者からの花束の贈与のもと、バラだのキクだのヒナゲシだの、さらには名もなき儂げな花など、病人の抛りどころの列挙をもって示唆されていた。

死の瞬間の到来を宙吊りし、少しでもこれを遅延させるそのためには、花を絶やしてはならない。それでもなお、かの庭では、宿根草であるにもかかわらずダリアの球根が掘り起こされたまま放置されて霜にあたり、腐ってしまうだろう。もうここに花のつく次の季節が訪れることはない。宿痾に抵抗し、わずかばかり彼女の生命を延長するには、別の花草へと不断にそれを更新していくよりすべがない。だからこそ、「妻は黙つて彼の顔を見詰めてゐた」⁷³ところに、彼は「何か冬の花でも入らないか」⁷⁴と問わずにはいられなかったのである。けれど冬の花の咲き、飾られることはついになく、「彼女も俺も、もうどちらもお互に與へるものは與へて了つた。今は残つてゐるものは何物もない」⁷⁵ことを、彼は、そしておそらく彼女も覚悟する。掘り起こされたダリアの球根が放置されたのは、まさにここでのことだ。

そうして「今は、二人は完全に死の準備をして了つた」⁷⁶がゆえに「彼の暗く落ちついた家の中」⁷⁷の静けさとは対照的に、「海際の白い道が日増しに賑やかになつて來た」⁷⁸そのとき、「彼の所へ、知人から思はぬスイートピーの花束が岬を廻つて届けられ」⁷⁹る。バラだのキクだのヒナゲシだの、さらには名もなき儂げな花だった湘南サナトリウムでの届けものが、ここではほかならないスイートピーの花束として実現されるのである。

とはいえ、もはやこれは、彼らが冬を、その宿痾を克服した行方に開示される生命の希望ではありえない。なるほど、この花束は、「長らく寒風にさびれ續けた彼の家の中に、初めて（…）匂やかに訪れて來た」⁸⁰はずの「早春」⁸¹であるにはちがいない。しかしながら、「馬車に乗って、海の岸を眞つ先きに春を撒き撒きやつて來た」⁸²それは、むしろ妻の死をこそ言祝ぐものとして、その「両手で胸いつぱいに抱きしめ」⁸³られるだろう。いまや彼らにとっての希望とは、病身の妻がわずかばかり生き長らえたその先にあるわけでも、死を越えたその向こう側にあるわけでもない。彼らはともに死を迎える準備を完了し、現にここに死を迎える。ここで彼らが叶えたのは、冬の厳寒を克服した行方に待つ希望としての春の温もりではなく、死ぬことの希望であり、むしろ死としての春である。要するに、ここでは死それ自体がまるごと希望であり、春そのものなのである。

このとき、スイートピーの「明るい花束の中へ蒼ざめた顔を埋めると、恍惚として眼を閉ぢた」⁸⁴妻は、冬に、宿痾に負け、その魂を奪われたのではけっしてない。そ

うではなく、スイートピーという春に、死という明るい花束に、手もとに届けられたその僥倖に恍惚と溶けていったのである。そこに色彩はない。もっぱら無彩色の光それ自身として、春の潜在性はまばゆい煌めきのうちに実現される。

スイートピーの「営利栽培は、明治末期になって神奈川県三浦半島で露地の切り花栽培がされている。同時期にガラス室でも栽培されていたが、観賞用で、営利的な切り花栽培は大正中期以降になる」⁸⁵うえに、「本格的な栽培は、神奈川県湘南地方で1929（昭和4）年に始まって」⁸⁶たようだ。というのも、もともと「花卉栽培は、横浜の開港を契機として、ヨーロッパ文化の導入とともに発展した」⁸⁷ところであって、要するに「開港によって在留外人が増加し、これら外人の愛好家によって新しい花が広められ、生活文化の向上で花への需要が増大したため」⁸⁸に、横浜を端緒に神奈川県下に広がり、日本でも次第に産業化していったのである。

たとえば「我が国特産の山百合はQueen of lily（女王百合）と外人に呼ばれた程にその花は大きく色彩も徒らに卑俗でなく花附もよいので、少くとも日本を訪れた植物愛好者としてこれ程美事な堂々たる花に眼を奪われない者はなかつた」⁸⁹ことから、「輸出品は百合の球根であるが、この百合に就ては遠く明治の初め頃からCockingの手に依つて行わされており（…）大勢の雇女の手で粘土で丸め込まれ藁包にして箱詰めされ遠く異郷の地に船旅されていた百合が（…）斯うも早くから貿易品に取り上げられる様になつ」⁹⁰ている。ここで百合の球根を扱った貿易商は、その屋号を「Cocking商会と銘打つて」⁹¹この事業を開始し、「当商会ハ紀元1868年横浜ニ於イテ開店セシ」⁹²ものと「当時としては行き届いた型録を発行して宣伝相努め」⁹³ていたが、そこでの記載が当の貿易商「Cockingの手記に日本初上陸を明治2年とされておる点と相違し」⁹⁴ていることもちに指摘されている。

いずれにしても、「輸出貿易品として植物関係のものを取扱つて来たCockingその人自身植物に相当の教養学識が高かつた」⁹⁵らしく、その事業に成功したサムエル・コッキング（Samuel COCKING, 1845-1914）は、「遇々一昔前に夢の島とあこがれた江の島に一日の清遊を試みて、この島が餘りにも美しい楽土でありその風光明媚にぞくこん惚れ込んでそこに居を設けようと（…）展望良い所をトして購入の手を打つたのは明治13年頃で外人に日本の土地所有権が認められていない当時のことゝ配偶者宮田りき名義で」⁹⁶土地を購入する。さらにここに建設された「Cocking屋敷」⁹⁷と道をはさんで、江島神社が「江島寺と称していた際の上の坊（…）所属であつた供御菜園と言われ供物と食膳に用うる野菜畑」⁹⁸

をも彼は入手している。ここは「島の最頂部で比較的平坦であつたが園芸に興味の深いCockingをして大々的に鋤入れが行われた。整地に造園に植樹に建造物に多くの人力で多大な資材」⁹⁹を費やして「工事は進められ温室や管理室の建設が大体Cocking植物園の一応形態をととのえられた時と見られ、それは明治18年（1885年）」¹⁰⁰のことである。

4. 2. 3

そうした経緯から「コキン植物園と島人は呼びならわしている江の島植物園」¹⁰¹には、このように、かつて「英本国から持込まれた温室用材で建て上げ」¹⁰²られた「約200坪の温室」¹⁰³があった。「当時日本最大の温室」¹⁰⁴だったこの「江の島に於けるCocking植物園のものは我国園芸発達史上に於ても温室栽培の先駆的立場に置かれる存在」¹⁰⁵であり、「現在は「江の島コッキング植物園温室遺構」が残」¹⁰⁶っている。

なるほど、「外国の花卉は明治以前から少しは長崎辺に入つていた様であつたがその大部分は外人の多い横浜で従つて温室が建てられたのも（…）横浜が古い時代のものゝ大部分を占めていた」¹⁰⁷ことは、浦賀沖から文明開化の音を聞いた当初、外国人居留地を横浜に限っていた日本の顛末として必然だったといえる。そのうえ、明治期には「温室の花はもちろん、一般露地栽培の西洋花は非常に高価なもので、外人以外にはほとんど顧みられない有様であり、その上温室経営には多額の資本と特殊な技術を要する関係で、一般農家には容易に手のつけられるものではなかつた」¹⁰⁸ところを、「日露戦争後の国力の増進と、生活文化の向上で、花に対する需要が増大し」¹⁰⁹たことをきっかけに、「大正初期から一層露地栽培が盛んになり、ついで十年ごろからフレームおよび温室の新設が各地にみられ（…）大正の末より昭和三、四年ごろにいたる数年間の花卉栽培の進展は実に目覚ましいものがあり、横浜市内の各地に導入されて、横浜の温室園芸の黄金時代を築き上げた。当時温室で（…）スイートピーも多少つくられた」¹¹⁰らしい。

三浦半島で露地栽培されたものか、横浜で温室栽培されたものか、どちらにせよ葉山の森戸海岸の借家で臥せる横光利一の病人のもとにあのスイートピーの花束が届けられたのは、まさにこの時機のことだ。

のみならず、横浜での事情に並行して「平塚・大磯・茅ヶ崎・二宮・秦野地域に温室花卉がその温暖な気候を利用して発展し、カーネーション・スイートピーなどがおもにつくられ（…）昭和五年には二宮園芸部においても温室花卉としてのスイートピー（…）などの試験研究がはじめられ」¹¹¹ていた。こうした状況はいまなお存続している。たとえば「茅ヶ崎市は湘南地方のほぼ中央

にある街で、(…)茅ヶ崎駅を起点に、相模川の左岸に沿って、(…)南北に貫いて橋本で横浜線とつながるのが国鉄相模線である。この相模線沿線の茅ヶ崎、寒川、海老名の三市町にまたがる一帯は花卉の生産地帯で、特にスイトピーでは東日本唯一の集団産地として有名である」¹¹²。

そればかりか、ちょうど〈赤いスイートピー〉が発表されたころの「スイトピーの集団産地としては、(…)国内生産の八割までがこの湘南地区に集中している」¹¹³たとされる¹¹⁴。相模湾に面した温暖な気候に加え、なにしろスイートピーの「切り花単価が安かったこと、切り花の品質保持技術もなく、花もちが悪く、輸送性に乏しかったことなどから」¹¹⁵、近隣に「京浜という大消費地を控えて」¹¹⁶これらの生産圏に地の利があったほか、特に「海老名の台地と茅ヶ崎の砂丘地帯を除いて、相模川流域の肥沃な沖積土壌がスイトピーやメロンの床土として理想的であったこと。加えて、古くから石垣イチゴを栽培し、施設園芸の技術も高く、組織力のあったこと」¹¹⁷が、こうした状況を支えていたわけだ。

このように、「耐寒性、耐暑性とも乏しい地中海気候型植物で、(…)冷涼な気候を好む低温伸長性の植物」¹¹⁸であるスイートピーは、「2月を過ぎると日長、日照時間も長くなり、気温も上昇することから、採花本数も多くなる」¹¹⁹ため、露地栽培のものにせよ温室栽培のものにせよ、その開花はまさに早春の訪れそのものの謂でもあろう。

ではいったい、横光利一の病人のもとに届けられるべくその花東が廻ってきた岬とは、三浦半島の突端の三崎か、葉山の南端の長者ヶ崎か。それとも、作家の想像力のもと、いまだ本格的には栽培の実現していなかった茅ヶ崎方面から、鎌倉の西端の小動岬を越えて逗子へと、そして葉山へとやってきたのか。

いったん商店街で自動車と併走する路面電車となった江ノ電が、その軌道をあとに腰越駅に入構したうえで、さらにはこれを背にして民家の軒先をくぐるようにすり抜けた眼前に海を認めたとき、その右手側で砂浜を囲う小さな岬、それが小動岬である。

茅ヶ崎あたりでスイートピーの温室栽培が本格的に着手されたちょうどそのころ、まだ東京帝国大学の学生だった太宰治(1909-1948)は、ここで心中を企て、相手の女性をそのまま落命させている。その翌日の新聞に、「相州腰越小動神社裏海岸に(…)若い男女が催眠剤のみ倒れてゐるのを発見、七里ヶ濱恵風園療養所に收容手當の結果男は助かったが女は死亡した、(…)女が男の病氣に同情し情死したもの」¹²⁰と報じられたこの事件に関して、のちに太宰はいくつかの作品のなかで言及している。たとえば、「銀座裏のバアの女が、私を好いた。

(…)私は、この女を誘つて一緒に鎌倉の海へはひつた。(…)女は死んで、私は生きた。死んだひとの事に就いては、以前に何度も書いた。私の生涯の、黒点である」¹²¹。

その『東京八景』(1941)でさらに彼が弁明するには、「私は泳げるので、海で死ぬのは、むづかしかった」¹²²のだというが、実際には彼らは入水したわけではなく、「小動鼻の突端につづく畳岩(畳磯ともいう)の上に、若い男女が倒れているのを発見」¹²³されている。この段階で「女性のほうは既に死亡していた」¹²⁴が、助けられた「男の(…)患者の口中に吉草酸に似た独特のにおいを発していること」¹²⁵が、対処にあたった医師によって確認されており、それゆえ彼女の死因はこの「睡眠薬に慣れていないところへ、一時に多量を服用したこと」¹²⁶によるものと推測できる。

この岬と稲村ヶ崎とのあいだの海浜が七里ヶ浜である。かつては湘南道路と称した、七里ヶ浜に並走する国道134号線に突きあたって、江ノ電は左手側に大きく針路を反らし、小動岬を置き去りにしていく。片瀬海岸から逗子海岸までの海辺に臨み、その景色を求める他地域からの過客を含む慢性的な渋滞で知られるこの道路は、「東へは片瀬から鎌倉滑川までが有料湘南道路として昭和三十一年七月一日開通している(昭和五十年三月一日無料開放)。さらに、滑川から逗子、葉山へ東京オリンピック直前の昭和三十九年十月八日に開通している(昭和六十一年七月一日無料開放。)(…)国道一三四号線となるのは昭和四十年のことである」¹²⁷。

これと並行し、ときに遅々として進まない渋滞の車列を追い抜きながら、背後では小動岬の蔭に隠れて寝そべっていた江の島が次第にその姿を露わとするなか、ほどなく江ノ電の車両は鎌倉高校前駅に到着する。その軌道の途中、海に対峙する丘の斜面を扶るようにして、衰弱した太宰が運び込まれた診療所は建っていた。逗子の小坪に湘南サナトリウムが開設される前年に創立され、江ノ電の軌道を横断して敷地に入るため踏切を備えたここもまた、結核の患者を療養させる「サナトリウム」¹²⁸だった¹²⁹。年号が令和に遷移するころまで恵風園胃腸病院として維持されてきたその病棟群は、もはや跡形もない。

なお、やはりこの事件を題材とした『道化の華』(1935)は、その療養所の眼下に広がる海浜の「前方の渚」¹³⁰に、「季節はづれの白いパラソル」¹³¹を登場させている。つまり、のちに松田聖子に提供される松本隆の歌詞に共鳴する光景を、横光利一につづき太宰治もこうして相模湾の海辺に準備していたことになる。

松本隆は、このような風土が紡がれ地層化した景色を脳裏でなぞりつつ、〈赤いスイートピー〉の歌詞を書いた。そして仮に、横光利一のスイートピーが、三浦半島

の突端の三崎でも葉山の南端の長者ヶ崎でもなく、この作家の想像力のもと、茅ヶ崎方面から、コッキングの島の島の温室を眺め、鎌倉の西端の小動岬を越えて七里ヶ浜沿いに稲村ヶ崎をまたぎ、さらには小坪の飯島岬をたどりながら、順にこれら海岸の町を訪ねてきたのだとすれば、その限りにおいて松本は、小動岬を越えて七里ヶ浜の領域に入った横光の馬車が、未舗装の路面で車体の跳ねる律動にあわせて海岸沿いの道端に撒いた、まさしくあのときの春の落胤をこそ、あらためてここに、この〔線路の脇〕に咲かせようとしたものにちがいない。まぎれもなくそれは、〔心の岸辺に咲〕き、〔心に春がきた〕ことの表象なのである。

横光のスイートピーの花束は、ここに埋められた妻の蒼ざめた顔との対比のなか、いかにも早春めいたその匂やかな明るさの印象が、あたかもこれをピンク系列の色彩であるかのように仄めかすものの、だが実際には、花の色をめぐる描写に紙筆は微塵も費やされていない。松本隆の言葉は、それを赤く彩った。

この色彩については、「肝心の「赤いスイートピー」は何なのだろうか。（…）そもそも、この世に「赤い」スイートピーがあるのだろうか（ピンクも赤の一種ではあるので、完全な間違いではないが）」¹³²だの、「ピンクのスイートピーはあっても、赤いスイートピーはない」¹³³だのと指摘されることもある。

実情としては、ここでスイートピーを赤く彩ったのは、CBS・ソニーで松田聖子を担当した若松宗雄（1940-）の一存らしい。すなわち、「まずタイトルを決めて、（…）「春先に出す曲だから、次は『赤いスイートピー』というタイトルにしよう」と。当時は赤い色のスイートピーはなかったようだけど、私のイメージの中では存在していた」¹³⁴のである。そしてこの題名を前提に作曲を松任谷由実に依頼したうえで、「そのメロディを松本（隆）さんに渡して「『赤いスイートピー』で詞を書いてください」とお願いした」¹³⁵のだという。

だが、なるほど現行の品種までの鮮やかさの程度はさておき、ある産地ではたとえば「1950年代は赤色系の栽培面積が60%を占めていたが、（…）これに対して、桃色系は50年代には20%程度であった」¹³⁶とされ、赤いスイートピーは旧来なら珍しいものではなかった。むしろ「花色が存在しない黄色、青色（水色）、緑黄色などは、古くから白色花に食用色素を吸水させて染色していた」¹³⁷わけだ。

ただし、赤色系の比率は、「その後は急速に減少し、1987（昭和62）年には5%以下まで低下し」¹³⁸た一方で、桃色系は「その後ほぼ直線的に増加し、1987年には65%以上を占め」¹³⁹ていることから、〈赤いスイートピー〉の発売当時には、単に市場の需要にもとづいてこの花色

の流通が制約されていただけのことと考えられる。

いずれにしても、横光利一のスイートピーは、あらゆる発色の可能性を担保して煌めく透明な光そのものうちに、まぎれもない春の潜勢力を実現した。それは、彼の妻の生としての蒼さを吸収し尽くす満遍なき輝きたる明るさであり、つまるところ死だった。だから仮に、「妹が死んだときは本当に世界が白黒になっちゃって。色がついてなくて。（…）偶然生きてるだけなんだって思った」¹⁴⁰松本隆が、「詞も断って、（…）それで二、三カ月したら色も戻った」¹⁴¹という場合、彼は、この眩むような輝きを彼なりの仕方でも濾過し、そこで分光されたひとつの春のありようとしての偏光を、さしあたって赤色に喩えてみたにすぎない。

ところで、「明治35年（1902）9月、江之島電気鉄道藤沢～片瀬間3.4kmが、日本で6番目の電気鉄道として湘南に登場」¹⁴²しているが、京浜急行電鉄の路線として現役の軌道を除く「各線が廃止されてしまったので、江ノ電は日本で2番目に古い電気鉄道ということにな」¹⁴³るほか、のちに「明治43年11月4日藤沢～小町間の全線開通」¹⁴⁴が実現している。したがって、恵風園療養所入院した太宰治がその運行に線路と車体の軋む音を聞いていたことはもちろん、小動岬を越えて海沿いの街道を急ぐ横光利一の馬車もまた、その小さな電車と並走していたはずである。

彼らのころには、当時は谷戸駅とっていた現在の腰越駅と日坂駅とっていた鎌倉高校前駅のあいだに、さらに細かく停留場が設定されていた。ひとつは、ほかならない「恵風園胃腸病院正門の踏切付近にあった」¹⁴⁵ものである。これには「大正時代の一時期、（…）恵風園前駅と駅名が付けられていたことがある。ところが、昭和初期の沿線案内では袂ヶ浦駅となっているので、恵風園前は俗称かもしれない」¹⁴⁶。もうひとつは、国道134号線に合流するように行方を遮られた江ノ電が、地肌を露出させた崖に沿って大きく左手に曲折し、七里ヶ浜を望む針路をとる地点、「このカーブが終った海側、道路との間に空間があ」¹⁴⁷って、現状は野趣を帯びた花壇になっているあたりで、もともとはこちらが腰越駅とされていたところを、「昭和になって（…）小動駅と駅名変更になった」¹⁴⁸ている。いずれもいまは廃止された。

この小動駅のあたりの線路に撒かれた春として、やがて廃止される駅のホーム跡に零れたそれが、新しい春の訪れとともに、もしくは春そのものとして、〔線路の脇〕のそこここに、〔心の岸辺〕に、あの海辺の花壇に、透明なままその潜在性を実現すること。このとき、いたるところ春の明るさをたたえて匂わしい無彩色のスイートピーの花、それゆえ誰のものとも知れず、どこまでも〔モノクローム〕でありつづけるその〔赤〕の文字に、

まさしくこれと頼んで誰もが自分なりの〔色を点け〕ることができたとすれば、きっとそれは、〈赤いスイートピー〉の場合には、あくまでも松田聖子の歌声の仕業なのだろう。

【註】

- 1 松本隆, 「『ロンバケ』はなにかのド中心を突いた、そんな作品だと思う。」、『pen』No.515所収, CCCメディアハウス, 2021, p.22.
- 2 同上。
- 3 同上。
- 4 同書, p.23.
- 5 同上。
- 6 同上。
- 7 延江浩, 『松本隆 言葉の教室』, マガジンハウス, 2021, p.53.
- 8 同上。
- 9 同上。
- 10 同上。
- 11 濱口英樹, 『ヒットソングを創った男たち 歌謡曲黄金時代の仕掛人』, シンコーミュージック・エンタテイメント, 2018, p.200.
- 12 延江, 前掲書, p.67.
- 13 同書, p.66.
- 14 同書, pp.66-67.
- 15 同書, p.67.
- 16 星晃, 『回想の旅客車〔上〕』, 学習研究社, 2008, p.52.
- 17 同上。
- 18 同上。
- 19 沢柳健一, 「80系湘南形電車のあゆみ」, 『鉄道ピクトリアル』No.743所収, 鉄道図書刊行会, 2004, p.9.
- 20 星, 前掲書, p.55.
- 21 同書, pp.55-56.
- 22 同書, p.56.
- 23 同上。
- 24 同上。
- 25 同上。
- 26 本稿では、あくまでも“湘南”を論じる観点から〈赤いスイートピー〉の歌詞を扱っているが、松田聖子の存在性と松本隆の作家性を論じる観点からすでにこの歌詞は詳細に分析されている。堀家敬嗣, 「【松田聖子】試論－歌謡曲の色彩－II－1」, 『山口大学教育学部研究論叢』第64巻第3部所収, 山口大学教育学部, 2014, pp.241-245. を参照のこと。
- 27 横須賀線百年出版委員会, 『横須賀線百年』, 神奈川新聞社／かなしん出版, 1990, p.144.
- 28 同書, p.126.
- 29 同書, p.17.
- 30 深谷研二, 『江ノ電 10kmの奇跡 人々はなぜ引きつけられるのか?』, 東洋経済新報社, 2015, p.61.
- 31 同上。

- 32 同書, pp.50-51.
- 33 同書, p.51.
- 34 同書, p.52.
- 35 湘南倶楽部, 『江ノ電百年物語』, JTB, 2002, p.157.
- 36 同上。
- 37 同書, p.156.
- 38 同書, p.157.
- 39 保昌正夫, 「作品に即して」, 『日輪・春は馬車に乗って 他八篇』所収, 岩波書店(岩波文庫), 1981, p.295.
- 40 横光利一, 「書翰107」, 『定本 横光利一全集』第十六巻所収, 河出書房新社, 1987, p.86.
- 41 同上。
- 42 横光利一, 「寝たらぬ日記 湘南サナトリウムの病院にて」, 『定本 横光利一全集』第十四巻所収, 河出書房新社, 1982, p.110.
- 43 島本千弥, 『海辺の憩い 湘南別荘物語』, 私家版, 2000, p.67. を参照のこと。
- 44 横光, 前掲書, p.109.
- 45 横光利一, 「書翰110」, 『定本 横光利一全集』第十六巻所収, 河出書房新社, 1987, p.88.
- 46 横光, 「寝たらぬ日記 湘南サナトリウムの病院にて」, p.110.
- 47 同書, p.109.
- 48 同書, p.110.
- 49 同上。
- 50 同上。
- 51 同上。
- 52 同上。
- 53 同書, p.109.
- 54 同書, p.110.
- 55 井上謙, 「評伝 横光利一」, 『新潮日本文学アルバム 横光利一』所収, 新潮社, 1994, p.47.
- 56 上林暁, 「「春は馬車に乗って」への郷愁」, 『文芸読本 横光利一』所収, 河出書房新社, 1981, p.94.
- 57 保昌, 前掲書, p.295.
- 58 横光利一, 『春は馬車に乗って』, 『定本 横光利一全集』第二巻所収, 河出書房新社, 1981, p.279.
- 59 同書, p.293.
- 60 同書, p.295.
- 61 同書, p.293.
- 62 同書, p.297.
- 63 同書, p.292.
- 64 同上。
- 65 同書, p.279.
- 66 同上。
- 67 同書, p.280.
- 68 同書, p.279.
- 69 同書, p.282.
- 70 同書, p.279.
- 71 同書, p.295.
- 72 同上。

- 73 同書, p.293.
- 74 同上。
- 75 同書, p.294.
- 76 同書, p.296.
- 77 同上。
- 78 同書, p.297.
- 79 同上。
- 80 同上。
- 81 同上。
- 82 同上。
- 83 同上。
- 84 同上。
- 85 井上知昭, 『スイートピーをつくりこなすー連続採花による安定生産技術の実験ー』, 農山漁村文化協会, 2007, p.20.
- 86 同上。
- 87 トラベル・メイツ, 『神奈川県風土記 風土と文化』, かなと出版, 1979, p.81.
- 88 同上。
- 89 内田輝彦, 『江の島植物園とサムエル・コッキング』, 藤沢市教育委員会事務局, 1961, p.18.
- 90 同上。
- 91 同書, p.17.
- 92 同書, p.26.
- 93 同書, p.27.
- 94 同上。
- 95 同書, p.44.
- 96 同書, p.28.
- 97 同上。
- 98 同書, p.29.
- 99 同上。
- 100 同上。
- 101 同書, p.37.
- 102 同書, p.42.
- 103 同書, p.41.
- 104 児玉幸多ほか, 『藤沢ーわがまちのあゆみー』, 藤沢市文書館, 1985, p.239.
- 105 内田, 前掲書, p.44.
- 106 鈴木良明, 『江島詣ー弁財天信仰のかたち』, 有隣堂(有隣新書), 2019, p.205.
- 107 内田, 前掲書, p.43.
- 108 トラベル・メイツ, 前掲書, p.81.
- 109 同上。
- 110 同書, pp.81-82.
- 111 同書, p.82.
- 112 若林泰雄, 「神奈川県産のふるさとーその六 湘南のスイートピー・平塚のバラ」, 『かながわ風土記』第47号所収, 丸井図書出版, 1981, p.60.
- 113 同上。
- 114 若林は「日本における温室の第一号は、明治の初年、サムエルという外人によって江の島に造られたといわれている」(若林, 前掲書, p.61.)としているが、ここで指摘されて
- いるのはおそらくサムエル・コッキングの庭園のものだろう。ただし、彼の来日それ自体が明治2年すなわち1869年のことであって、1880年に江の島に別荘を建築し、1882年からとりかかった庭園の造営が温室を含め完成するのはさらに遅れて1885年である。また、内田によれば、日本における温室は1870年に東京の青山に設置されたものが最初であり、したがって若林の記述は誤りとなる。内田, 前掲書, p.43.を参照のこと。
- 115 井上知昭, 前掲書, p.20.
- 116 トラベル・メイツ, 前掲書, p.82.
- 117 若林, 前掲書, p.62.
- 118 井上知昭, 前掲書, p.16.
- 119 同書, p.42.
- 120 長篠康一郎, 『太宰治 七里ヶ浜心中』, 広論社, 1981, p.5 (図版資料)。
- 121 太宰治, 『東京八景』, 『太宰治全集』第四巻所収, 筑摩書房, 1976, p.78.
- 122 同書, p.86.
- 123 長篠, 前掲書, p.125.
- 124 同上。
- 125 同上。
- 126 同書, p.129.
- 127 島本, 前掲書, pp.398-400.
- 128 太宰治, 『道化の華』, 『太宰治全集』第一巻所収, 筑摩書房, 1975, p.126.
- 129 当時の恵風園診療所の様子については、昏睡状態で運び込まれた太宰の応急手当てを担当した所長に取材した長篠の著作が、図版資料を含め詳しい。長篠, 前掲書, p.117-129.を参照のこと。
- 130 太宰, 前掲書, p.157.
- 131 同上。
- 132 中川右介, 『松田聖子と中森明菜』, 幻冬舎(幻冬舎新書), 2007, pp.178-179.
- 133 中川右介, 『阿久悠と松本隆』, 朝日新聞出版(朝日新書), 2017, p.325.
- 134 濱口, 前掲書, p.197.
- 135 同書, p.198.
- 136 井上知昭, 前掲書, p.23.
- 137 同書, p.24.
- 138 同書, p.23.
- 139 同上。
- 140 山下賢二, 『喫茶店で松本隆さんから聞いたこと』, 夏葉社, 2021, p.35.
- 141 同上。
- 142 湘南倶楽部, 前掲書, p.14.
- 143 同書, pp.14-15.
- 144 同書, p.36.
- 145 同書, p.156.
- 146 同上。
- 147 同上。
- 148 同上。